

本文書は、小林一三が中野家を訪問した時の出来事を後日自らの書籍に著したものです。
なお旧字体は読みやすさを考慮し、一部新字体に訂正しております。
また文中敬称略とさせて頂いております。ご了承下さい。

中野春山邸の美術品

石油王中野春山(忠太郎)翁蒐集の美術品を鑑賞すべき好意を得たる一行に加わる光栄を得て七月十五日夜行にて上野を発つ。東道の案内役は松永一州子、それに誘われるもの北大路魯山人、細田燕臺子と、余と合わせて同行四人。越の朝風に涼味爽快、七時新津に着く。駅前の小亭に一浴し終わると、新潟より約を履んで白勢翁並びにその令息来着、直に自動車にて行くこと三十分。早苗をわたる涼風は面に迫り、前陵後丘、油櫓を点綴する間を縫うて、九時、中野邸の門前に着く。主人中野忠太郎氏は北越第一の富豪、故中野貫一(鶴堂)氏の長男であって、賢父と共に多年辛苦を嘗め尽くして功今日の大成を勝ち得たる立志伝中の人、春山と号し齡七十余歳白髪童顔いんぎんにして質素である。直に玄関脇の一室に迎えられて一応の挨拶がすむと、前日来東京よりお手伝の伊藤大好堂、中島清心堂の両名によって既に各室に飾られたる多方面の美術品は、如何に主人の熱心と大度量とによって集められたるかは、各室の満艦飾が充分にこれを証明している。大邸宅の山手に近き大部分は三ヶ年の日子を経て竣成したる新館であって、中庭を取り込みたる周圍は、阿房宮もかくやと思う二階建の高楼大小各種数うれば或いは百を越ゆるであろうか。各室のなげしにはその三面に必ず額あり。山陽、貫名、梅逸、秋暉から高僧貴紳当代の名士画伯に至るまで、和洋各種数うる能わず、床には名幅名花瓶床脇違板には、卓や香炉や、料紙硯箱、秩帖文鎮等、煎沫両式、所謂送迎にいとまあらぬので、時に階廊に息うて驚嘆するのみである。

屈曲数百間の長廊下は『幅九尺、未口六尺、長さ三十三尺の檜一本、一時の相場は代金二万円とまで言われたのであったが八千五百円で仙台から買って来た』と話された有名なる檜の長板、拭きぬいてかがやくばかり、二階正面三間つづきの大座敷の欄間は能登国大島五雲作桐生地に梅の樹松が枝両面彫で、左右のなげしには、上野東叡山寛永寺伝来の為恭筆吉野、龍田、春秋山水の額面が相對して居る。「靈泉不盡」の御額は閑院宮殿下の御筆と——書き出すと際限がない。この大広間で、初めに鄭重の酒肴の御膳が出て、御飯は高蒔絵、二の膳つき御台所御料理は当家専属のお賄いにて流石に贅を尽くせるおもてなしを受けて、それより庭園のそぞろ歩き折柄小雨蕭々として緑陰

に雫す。各国の名石は園内各所に散在してその赤きものは佐渡より、その青きものは四国より而してその間に御影石のライオンあれば青銅の觀世音立像あり池をのぞむ所仁王様もあれば布袋の座像もあり。流れに添って丘陵を爪坂道、麓より山に登れば、中野家未蔵の鉦油は、明治八年以来こんこんとしてここに五十八年、毎日百石の原油を信濃川の河口に管送する工場の建物と、古りたる幾多の油槽とを赤松の梢をとおして眼下に見つつ右往左来、先代鶴堂翁御夫婦の銅像や鶴堂翁格言の燈籠や、石柱や、小泉三申翁伝来の文珠堂を拝して再び楼上の茶室に憩い、更に、大広間にて名器数十点眼福の限りをつくし、五時過ぎ同家を辞して六時新潟、行形亭に一浴し九時三十分發夜行にて翌十七日朝七時上野に帰る。

春山邸に居ること僅かに八時間、一幅の名画に惚然として心ゆくばかり楽しみ、一碗の茶に、とつおいつ、未練の情あるがまを叶い得たならば、恐らく、この日觀賞の十分の一も拝見し能わぬであろう。春山家所蔵品の何分の一、あるいは何十の一を、かく、急速に觀過したるは心残りいとも多き業にて、名器に対し聊か軽じたる感ありとしても、之を寛裕したまえるご主人の大量に何とお礼を申し上げて良いだろうか。また再び、これを繰り返す機会を与えられんことを祈りつつ、当日の心覚え(漏れたものも沢山にあるけれど)を下に記すのである。

幅

- 一、為恭 光明寺殿鎌倉武士賞射衝図
藤原公任迎三船嵐峡図 尺五絹本双幅
- 一、崑山 鵜
- 一、雪舟 芦雁双幅 (大澤家伝来)
- 一、歌麿 美人水鏡の図 (松浦家伝来)
- 一、竹田 龔米之図 紙本堅幅 (大澤家伝来)
- 一、乾山 紅葉菊花画賛 (大澤家伝来)
朝日影うつる梢の霜とけて
いろ染まる庭のもみち葉
影しあれば水の上にも大澤の
波のいろなる秋の白菊
- 一、玉堂 水墨山水 紙本半折
- 一、山陽 水墨山水自画賛 堅幅
- 一、景文 雪月花絹本尺幅三幅対
- 一、雅邦 十六羅漢 双幅 (川上操六家伝来)
- 一、木米 楼閣山水 紙本半折
- 一、雪舟 図窓秋月山水 横幅

- 一、 崑山 于公鴻門之図 絹本堅幅 (菊地家伝来)
- 一、 竹田 梅花書屋 紙本尺八 (長野善五郎氏伝来)
- 一、 燕村 枯木群鴉 紙本堅幅
- 一、 大雅堂 白雲紅樹図 (船橋家藤田家伝来)
- 一、 崑山 水墨芦雁
- 一、 崑山 人物画賛 紙本堅幅
なかぬものは
行燈ばかりきりきりす
- 一、 周文 湖山小景山水 堅幅 恵鳳禅師賛 (鹿島家、島家伝来)

香合

- 一、 鎌倉時代錫淵蒔絵香銘秋野の (金澤具庵、名古屋織田家伝来)
- 一、 青磁犬鷹香合 (加藤家伝来)
- 一、 白呉州臺牛四方入香合 (松平家、三井守之助氏伝来)
- 一、 呉州赤絵四方入香合甲橘 (赤星家高値札 39,000 円 三井守之助氏伝来)
- 一、 呉州モッコウ香合 (加藤家伝来)
- 一、 染付水牛四方入香合 (三井守之助氏伝来)
- 一、 交趾丸龍香合 (三井守之助氏伝来)
- 一、 交趾笠牛香合
- 一、 祥瑞立爪香合 (蜂須賀家伝来)
- 一、 黄交趾臺牛香合 (三井守之助氏伝来)
- 一、 紅毛白雁香合 (同上)
- 一、 青磁桔梗香合 (不味公箱)
(松平家熊澤家伝来)

鉢

- 一、 赤絵玉取獅子 (加藤家伝来)
- 一、 白呉州見込蓮鷺 (同)
- 一、 祥瑞ネじ (三井守之助氏伝来)
- 一、 呉州赤絵花鳥
- 一、 備前スワマ形手鉢 (三井守之助氏伝来)
- 一、 天龍寺青磁浮牡丹

茶碗

- 一、 絵高麗梅バチ平茶碗
- 一、 白呉州山水の絵茶碗 (不味公箱)
(松平家伝来)

- 一、 光悦赤茶碗（加賀光悦）
（松平家、高橋箒庵伝来）内箱相加賀仙叟所持 宗範

- 一、 加賀井戸茶碗（松平家熊澤家伝来）外箱益田鈍翁
茶入

- 一、 唐物福原茄子 茶入（伊達家入札高値札五万七千円添）
- 一、 吹上文珠茶入（松平家伝来）不味公箱箒庵由来記一卷添）
- 一、 思い川茶入（松平鶴堂入札高値札三万八千円添）

通茂卿色紙幅添

山吹の花におかるる思い川

したに染めつついろの血汐は

香炉

- 一、 琅玕鼎式香炉（藤田家伝来）（入札高値 40,000 円添）
- 一、 袴腰礎大香炉（加藤氏伝来）
- 一、 礎青磁千鳥香炉
内箱たがやさん 外箱黒塗白粉 宗外
（堀子爵家伝来、加藤政義氏由来書添）

料紙硯箱

- 一、 五色埋物高蒔絵料紙硯箱（本郷藤堂家伝来）
銘 日ぐらし

煎茶器

- 一、 木米白泥涼炉（花月庵伝来）
（大正甲子六月、宣庵主人宛譲状添）
紫交趾急須、白磁地役水滴、その他添之
- 一、 古染付芦雁煎茶碗 五客（竹雲箱）
- 一、 木米 蘆堂七碗
- 一、 木米作 春琴下絵 五客
- 一、 朱泥三友居 一对

帖

- 一、 光悦（金泥色紙歌仙）
- 一、 竹田水墨淡彩山水帖
- 一、 是真 漆絵帖
- 一、 古筆帖

屏風

- 一、 又年 歌舞伎六曲小屏半双

- 一、 筆者未詳お茶々屏風 一双 (淀君所持伝来)
- 一、 伝又平櫻花美人歌舞図 二枚折 半双
- 一、 宗達美人手鞠図 二枚折 半双 (下村観山伝来)
- 一、 又平 異国模様美人揃 六曲屏風 一双 (松浦家伝来)

手箱

- 一、 時代蒔絵扇面図手箱 (紀州徳川家讓状添)

花瓶

- 一、 安南絞手雲龍花生 (藤田家伝来)
- 一、 古伊賀両耳花生
- 一、 古伊賀杵花生
- 一、 南蛮大
- 一、 周銅雷

その他

- 一、 吳州十二角水牛絵水指 (蜂須賀家伝来)
- 一、 仁清茶壺 瀧鯉魚極彩色 (上下黒藁)
底信楽共土、彫銘
(京都一心寺伝来、石井家伝来)

以 上

私達が大広間の毛壇の上でこれらの名幅や名器を、額を集めて、息を呑んで、お互いに凝視している時、御主人は、恰もそれは何人かが物好きに買い集めた、平凡なものであるかの如くに、他人の仕事を傍から冷視しているかの如くに、頗る横揚に取り澄まして何ら説明がましい態度の絶無であった事は、流石に御大家の太腹が伺われて嬉しかった。世間の噂によれば、この不景気時代の救世主として、各方面から歓迎せられるので、ここ一兩年の間に三百万円以上購入したという話であるが、恐らく私達の拝見したのは所蔵中のその何分の一かであろう。

大雅堂の白雲紅樹図、竹田の梅花書屋、華山の于公鴻門のような有名な幅の如き、本格的の大作として敬意を表するものや、周文の湖山小景山水など今尚眼前に彷彿としている。雅邦の傑作十六羅漢双幅が当家に収まったことは正にその所を得たもののように思われる。

浮世絵の時代屏風や二枚折りのものには傑作が多い。とりわけ、松浦家伝来又兵衛作異国模様美人揃六曲一双は其一物とハイカラ模様の衣装色彩など恐らく天下一品であろう。宗達の美人手鞠図二枚折半双と、伝又兵衛、歌舞伎小屏風、筆者未詳淀君遺愛品お茶々屏風は忘れられぬものである。

茶碗では松平家伝来加賀光悦は地厚で色変わり鮮やかに、流石に名器と頷かれた。評判の加賀井戸は、大師会当時からの値段の噂を聞いておったので、実見して寧ろその価格の高きのに驚かされた傾きがある。松平家伝来白呉州山水の絵茶碗もゆがみ丈に一寸記憶に残る。

茶入は唐物福原茄子、吹上文珠、思い川の三つを拝見したが、これに就いては、この次の号に名物茶入感想記でも書きたいと思っているから省略する。

香合は型もの番附のものばかり、青磁、犬鷹、染付四方入水牛は嬉し、呉州赤絵四方入(甲橋)は赤星家伝来とその当時から入札高値利付の取引で噂の方が、実物よりも高い感じがある。最近名古屋織田家入札の鎌倉時代錫淵蒔絵香合、銘「秋野の」は逸品である、祥瑞立爪は、普通よりコバルト色が強い。鉢類では赤絵玉取獅子、赤絵花鳥よりも祥瑞のネジと白呉州見込蓮サギがほしいなど思った。

香炉は藤田家伝来の琅玕鼎形、袴腰キヌタ大、その外に、太閤伝来名物千鳥の香炉を見たが、堀子爵伝来、故加藤正義氏買入の事情なぞ由来書沢山であったが当家御主人の説明が面白いと思った『この有名なる千鳥の香炉は三足が不揃いで安定しておらない。まがっている、酒呑みの足が乱れて歩く時、俗にこれを千鳥足というとはその原因正にこの香炉から出ているそうです』と咄々やとして物語られたが、この香炉に対するあらゆる問題を超越して好感を持たせられたのである。

本郷藤堂家伝来五色埋物高蒔絵料紙硯箱銘『日ぐらし』に就て当初二十万円ならでは売却せぬと主張せられたものを、交渉物別れが重なる度毎に、何割か値引きするを原則としている仲買人の主張が勝利をしめて、結局十万円内外で外引が出来たという話であるが『高島屋が日ぐらし模様の帯地を調製したいというので先日写生に来られました』というような評判の高い割合に、私には他の優秀品の印象が深いのであった。

煎茶器には大阪で数回見たことのある花月庵伝来木米作白泥涼炉や木米蘆堂七碗、古染付蘆雁五客、朱泥三友居一対、その他いろいろ拝見したけれど忘れてたり。花瓶には伊賀二つ、南蛮大、それよりも藤田家伝来と覚えたる安南が珍しいものであろう。周銅雷は五月税田家入札分と同手であった。

帖は光悦の金泥色紙、竹田の水墨淡彩山水、古筆帖など、ゆるゆる披見の閑なきは心残りであった。

紀州徳川家讓状添の時代蒔絵扇面模様手篋や、蜂須賀家伝来呉州十二角水指、仁清茶壺、なぞいずれも来歴正しいものであるが、これらの名器を観尽しつつ箱書付など抜き見ると、いろいろの付属書類が現れるので後世の参考にもと書き留めて置いた。不味公伝来、左記一口を譲り受けた熊澤氏の度胸のエライのにも一驚を喫した次第である。

松平家讓状

- | | |
|----------|-------|
| 一、加賀井戸 | 三十二万円 |
| 一、茶入吹上文琳 | 十一万円 |
| 一、茶入思ひ川 | 八万円 |
| 一、青磁桔梗香合 | 十一万円 |
| 一、周文釈迦 | 十万五千元 |

昭和三年十月

この外、一口にて当家と取引せるものと覚ゆる書付は

鹿島家伝来	周文山水	十五万九千三百円
川崎家伝来	インダラ寒山	五万三千九百三十円
同	卒翁六祖	四万二千九百三十円
佐竹家伝来	雪村帆掛船	五万二千三百円
井上侯伝来	黄瀬戸若杜水指	七万二千九百円
徳川家伝来	紅葉呉器茶碗	五万円
伊達家伝来	福原茄子茶入	五万七千円
阪本家伝来	呉州日月鳳凰火入	二万五千九百円
田村家伝来	御本松松竹梅茶碗	二万六千九百円

この外、加藤家(故加藤政義氏)より一口取りそろえた大物には、

赤絵玉取獅子鉢

白呉州見込蓮サギ鉢

豊公伝来砧青磁千鳥香炉

青磁犬鷹香合

以上金十一万円

六年十二月讓状

なぞ、あらわに記述するのも礼なき業にて、控ゆべき事と顧みたれど、凡その種の記録は、後世に残す興味の語り草たるべきものであって、俗に似て却って俗ならずと理屈はどうでもつくものと、旅の恥は書き捨ての心持で、忘れぬ先にと筆をとる。

(七年七月廿四日)

(本文は雅俗山莊漫筆第二卷五十四頁より七十頁にかけての、記事をそのまま転用させてもらったものである。今年八月本書は小林氏知己の間に配られたる氏の趣味生活を語る道楽本、和綴にして非売)

以上